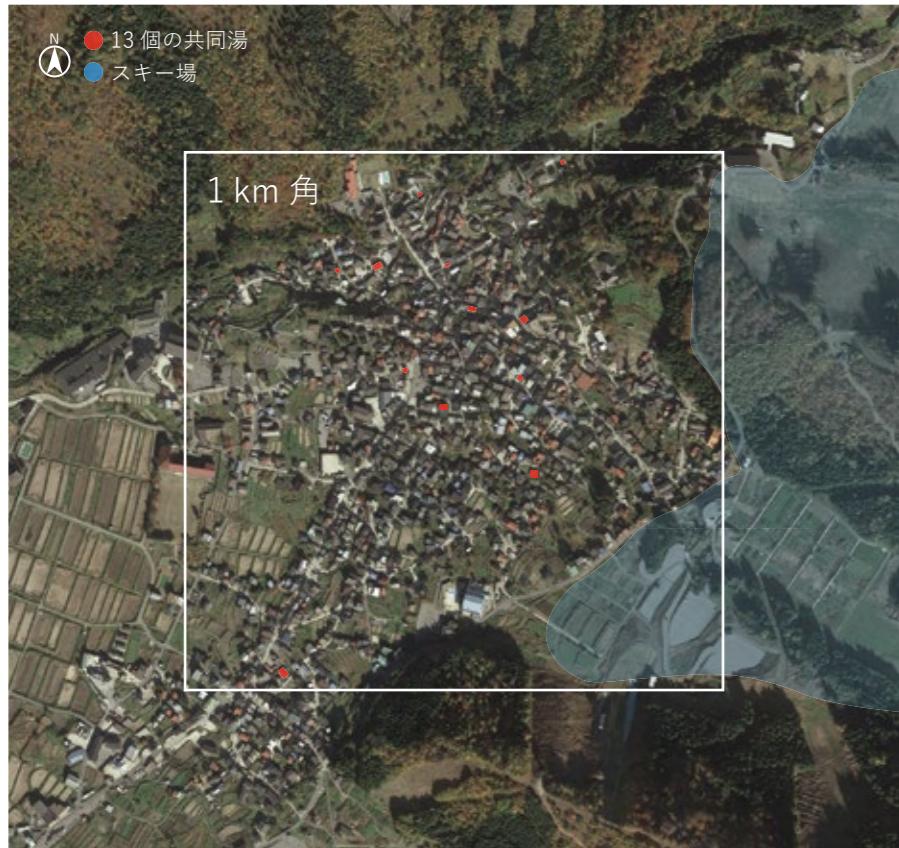


2. リサーチ__温泉の街、野沢の構造とお湯の公共性

1. 敷地__温泉のまち、野沢



□お湯に集まる野沢の歴史



鎌倉～江戸

山間に温泉を発見し、共同湯の周りに集まって住むようになる。山の向こう側からの来客で湯治場としても栄えた。



大正～現在

野沢に日本初めてのスキーが伝来し、スキーブームが起こる。13個の共同湯とスキーの人々が集まる。



□共同湯と野沢の風景



□お湯と暮らし

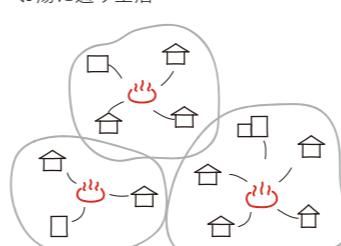


□祭り市場



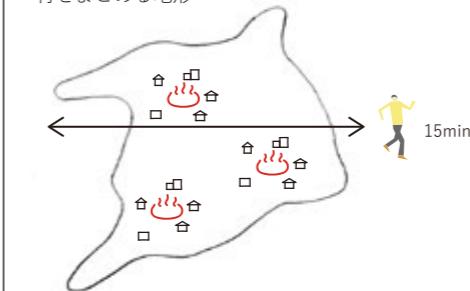
□野沢の構造

・お湯に通う生活



13個の区がそれぞれ共同湯を持ち、住民が湯仲間を形成して維持・管理を行う。毎日お風呂の時間になるとお風呂セットを持って自分の区の共同湯に通う。

・村をまとめる地形



山と川に囲まれた地形が、村としてのまとまりを作っている。端から端まで歩いても15分ほどのコンパクトな街。野沢の住民は、村全体を生活圏としている。

・共同湯周辺が広場である



野沢の祭りや催し、市場は共同湯周辺が開催地となる。住民は入浴時以外にも共同湯に集まる。それぞれの共同湯が中心性を持ち、13個の共同湯全体が村の骨格を成している。

・源泉が広場である



80度の源泉が毎分500L湧き出る麻金は、大きな源泉広場となって住民の台所としても使われる。共同湯の多くが麻金から湯を引く。

・温泉街のスケール



野沢の温泉の権利は、室町時代の「惣」を発端とし現在まで続く自治組織、野沢組が管理する。行政とは異なる組織が温泉権を持ち、自分たちで運営することで、野沢の温泉は守られてきた。野沢の湯を守る体制のおかげで温泉街によくみられる外部資本の参入が防がれ、野沢の心地よい小さなスケールが今も残っている。

□共同浴場の起源と公共性

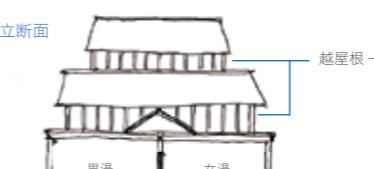
人類の歴史上、入浴行為とは集団で行うものであった。古代ギリシャでは、入浴は自己表現や歌、踊り、スポーツと関わりがあった。

古代ローマではコミュニティセンターとして、食事や運動、読書や議論の場としての役割を果たしていた。また、様々な階級・人種の人々が接触するという民主的な役割を持つ場であった。このように、共同浴場は様々な立場の人々が活動を受け入れる場所であり、都市のなかの公共の場としての可能性を持つ。



□湯屋建築のつくり

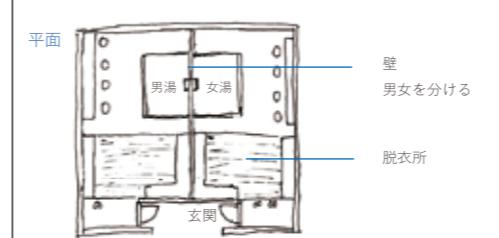
野沢の共同湯の大半は、一般的な湯屋建築のつくりを用いている。それぞれに大きな違いはなく、建築のつくりとしては一様である。



□村の変化と課題

一人暮らしが難しくなった年配の村人は家を売り、村を出て都会の家族と住むようになる。こうして空家が増え湯仲間が減り、共同湯の運営が難しくなっている。

また野沢の冬はスキー客で賑わい、海外客も多い。冬場のみ野沢で暮らす海外移住者がこのような空家や宿泊施設を買収・改修し、海外客に向けた内輪のビジネスを行っている。海外移住者はスキーを目当てとしており野沢のお湯暮らしへの理解が薄く、村人との関係が希薄である。



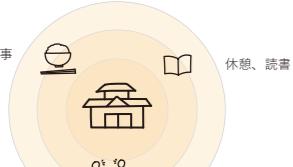
人の入れ替わりという変化が起こるなか野沢のお湯暮らしを継承していくために、お湯のまちに集まる人々全員のための相互理解の場所、お湯暮らしの魅力を共有する場所が求められる。

3. 提案 共同湯の拡張

共同湯を拡張、または入浴以外の生活の場所「待合い」を共同湯に加え、お湯暮らしを支える新たな骨格をつくる。
共同湯を、村人、他県からの移住者や滞在者（潜在的移住者）に加え、お湯への関心が薄い海外移住者も立ち寄れる場所にする。
様々な立場の人が村の魅力を共有し、お湯暮らしを継承していくための場所をつくる。

□共同湯の拡張

お湯は公共性と多様な活動を支える力強さを持つ。
共同湯を拡張して入浴だけではない。
その他の生活の共有を可能にする。



□拡張の方法

共同湯の拡張方法は以下の2つ
 ① 共同湯をそのまま拡大し大きな千人風呂としたり、
 共同湯を広げて源泉広場としたりする。
 ② 共同湯に、入浴以外の生活の場（住居、洗濯場、
 調理場、湯治宿、休憩所、居間、書斎、畳など）
 を加えて拡張する。

このようにして拡張された部分を「待合い」と呼ぶ。
「待合い」を持つ共同湯は、
お湯を使うついでに集まって過ごすことで
お湯暮らしの魅力が共有されていく場所となる。

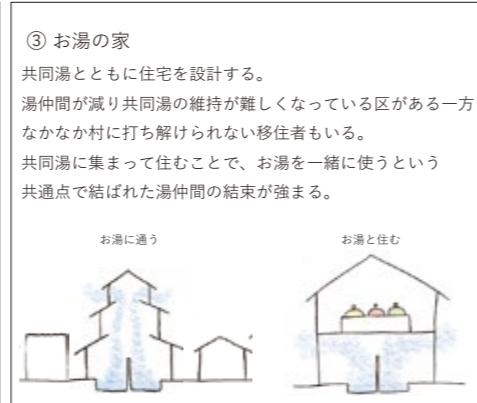
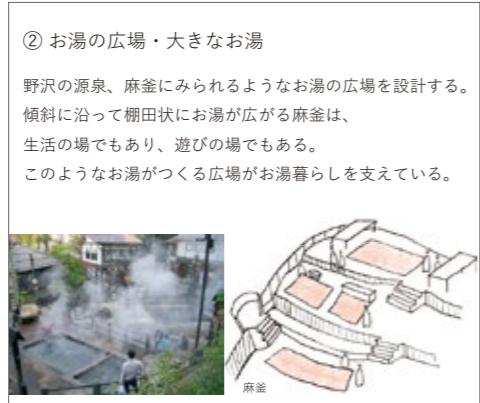
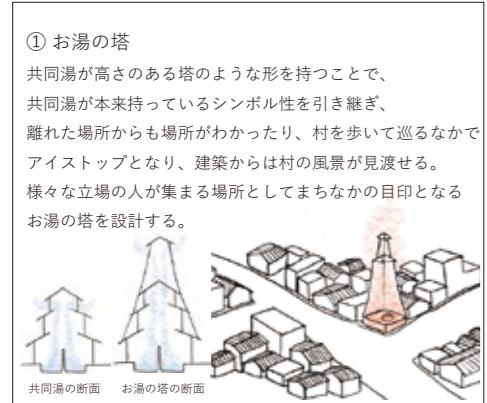
□13の「待合い」によるお湯暮らし

13個の共同湯それぞれに違う機能、違う空間が加えられることで、
共同湯ごとに個性が出てくる。
2か所以上の共同湯を利用したり、隣の共同湯に遊びに行ったり、
いくつかの区で協力して湯を管理したりして自分の区にとどまらない
村全体での暮らし方が生まれる。



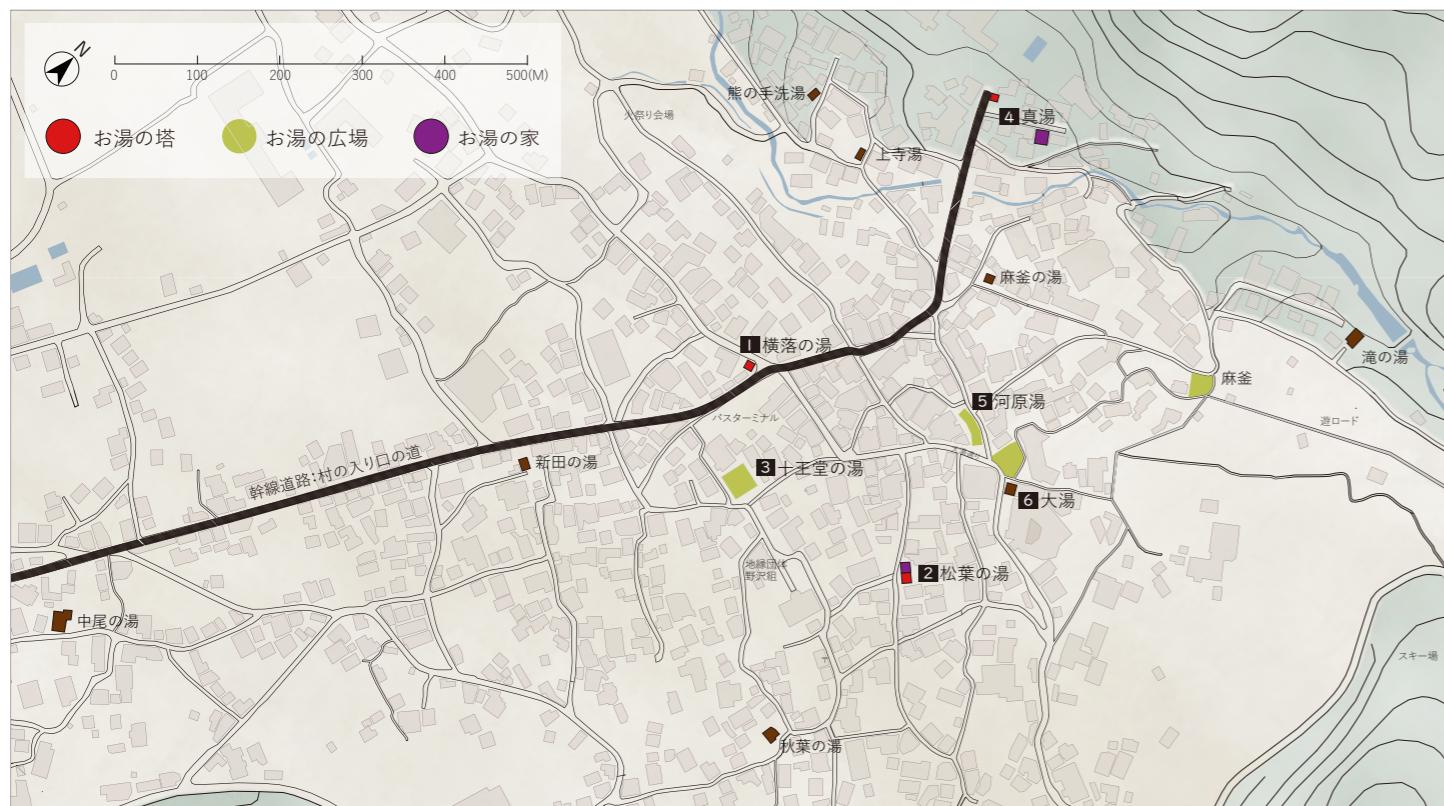
□お湯暮らしの骨格をつくる3要素

村の構造や街に必要なものを手掛かりとして、お湯暮らしの骨格をつくる要素を3つにまとめ、その3要素を掛け合わせて建築を設計する。



□全体配置図

お湯の塔・広場・家の配置を、村の全体計画とそれぞれの敷地条件から決定し、13個の共同湯のうち下記の①から⑥の6か所（建築は7つ）を設計する。



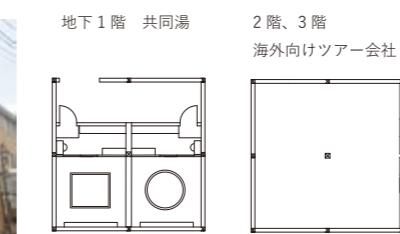
I 横落の湯 お湯の塔 <改築>

現状写真

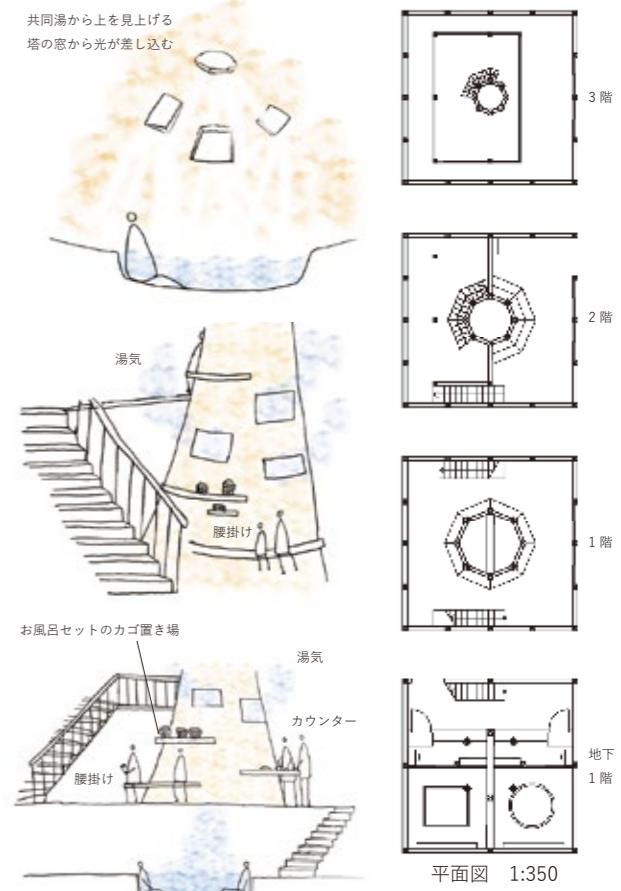
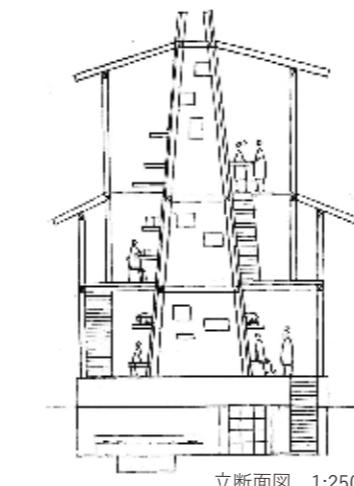


現状平面図 1:400

地下1階 共同湯
2階、3階
海外向けツアー会社



地下1階共同湯を残し、2階3階を改築

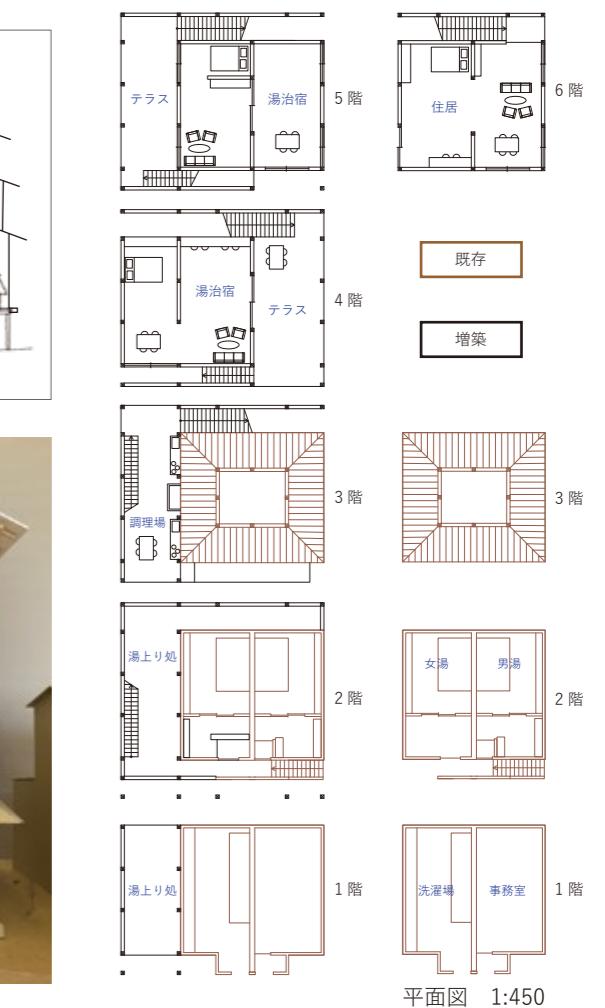
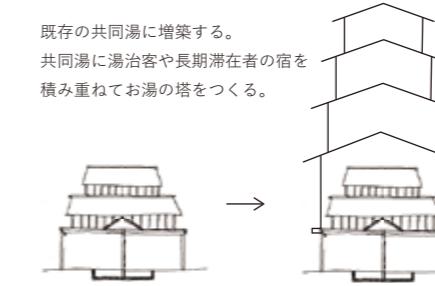


2 松葉の湯 お湯の塔 × お湯の家 <増築>

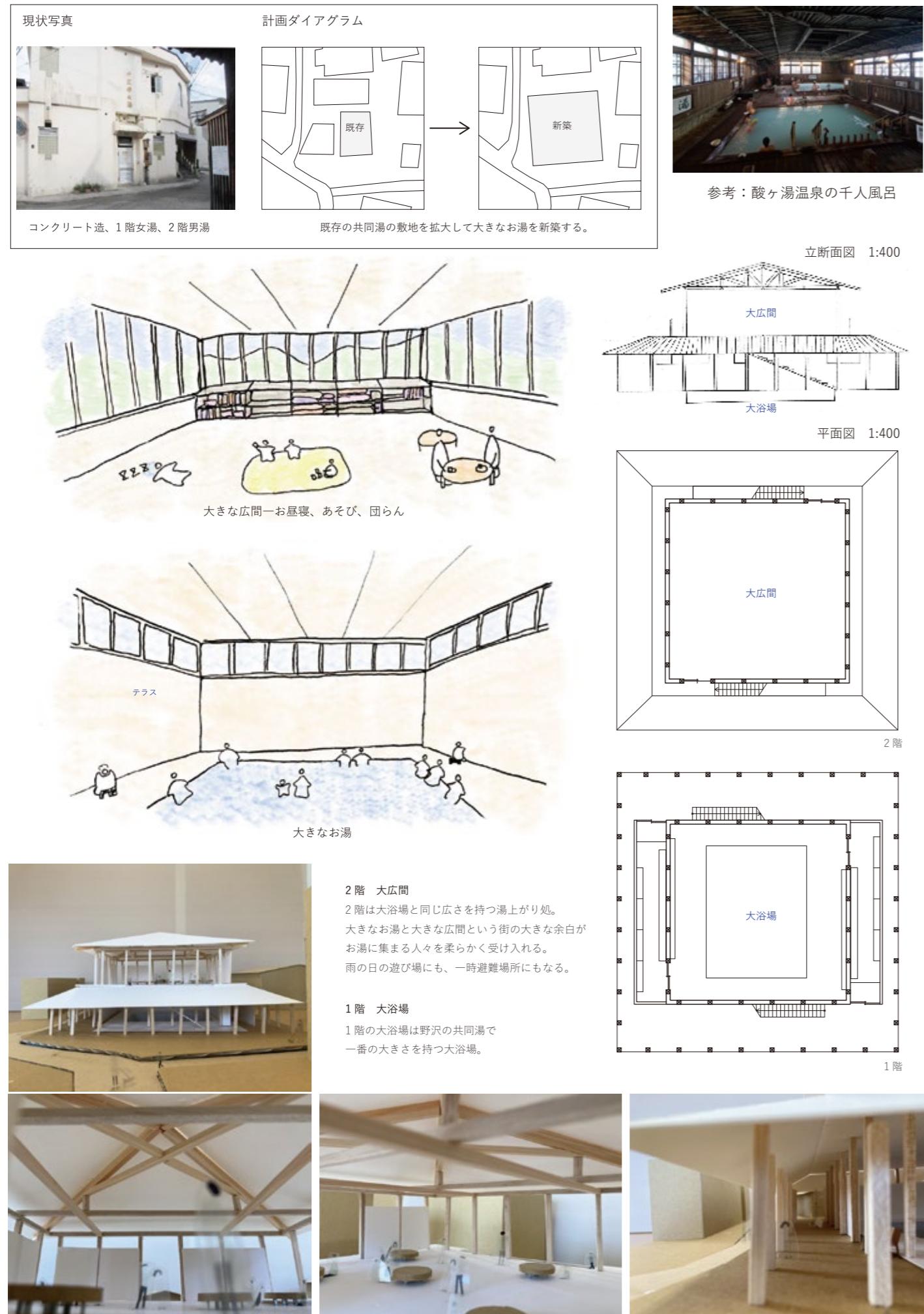
現状写真



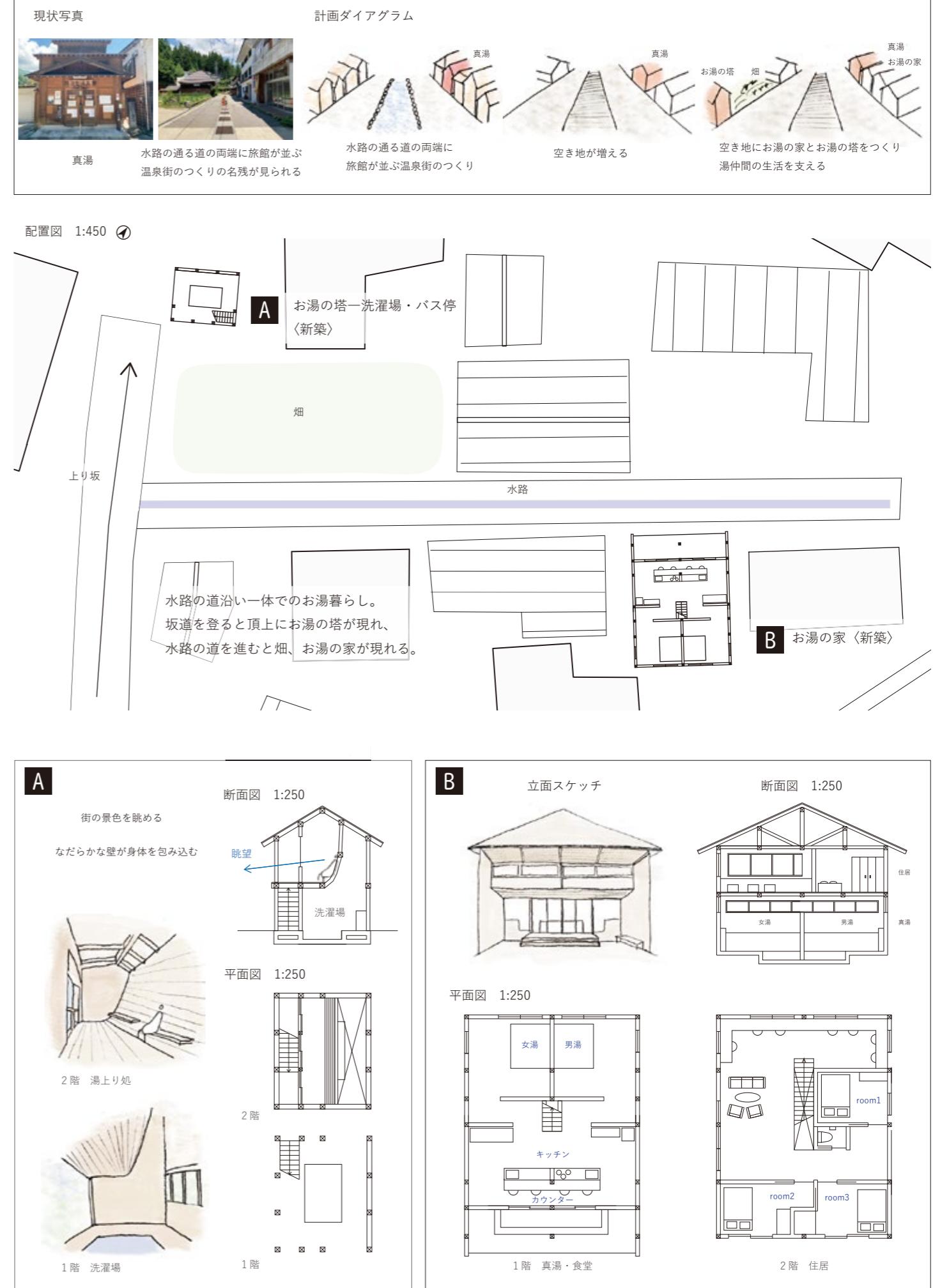
計画ダイアグラム



3 十王堂の湯 お湯の広場 <新築>



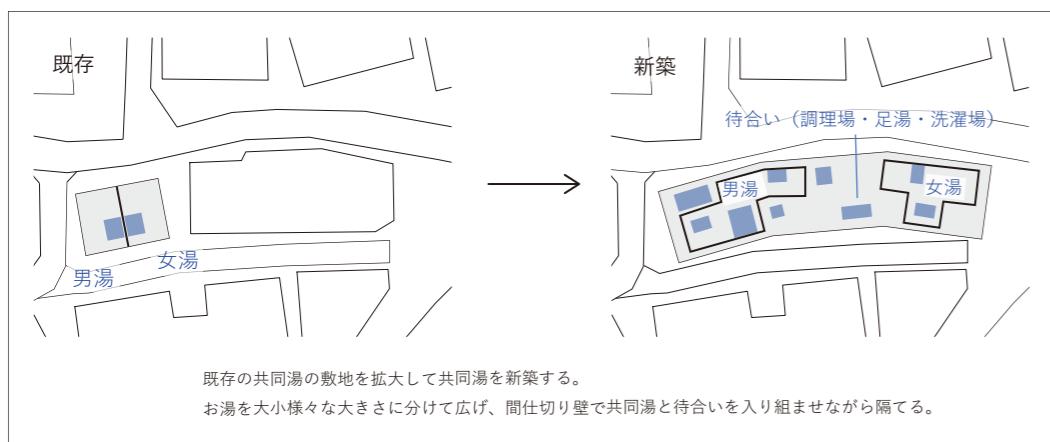
4 真湯 お湯の塔 <新築>・お湯の家 <新築>



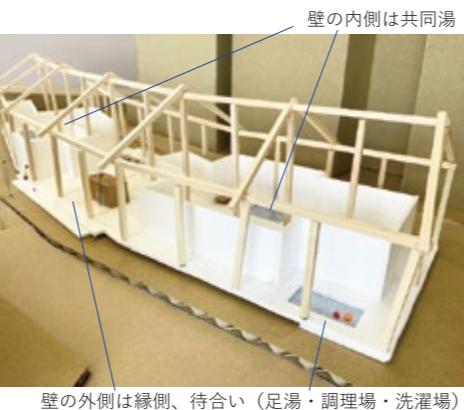
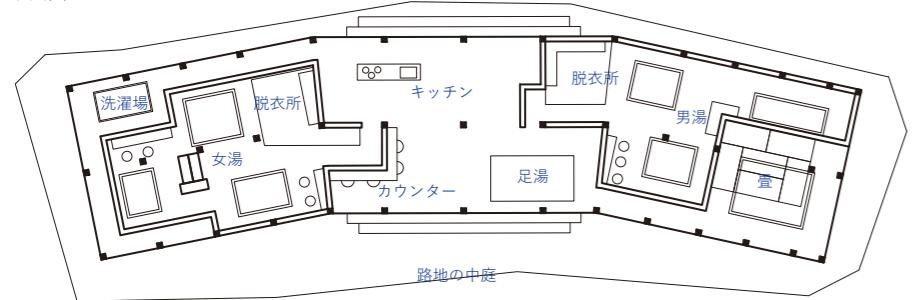
5 河原湯 お湯の広場 <新築>



計画ダイアグラム



平面図 1:150



6 大湯 お湯の広場 <新築>

